

英国におけるシェイクスピア作品の教育効果についての動向	
青木 敬子	比較社会文化学専攻
期間	2006年9月29日～2006年10月8日
場所	イギリス ロンドン、 リーズ
施設	ロンドン大学、 ロンドン大学教育学部図書館、 ブラントクリフスクール、 ブロンテ博物館、

内容報告

1. 導入

2006年9月15日、英国の新聞タイムズ教育版において、シェイクスピア劇団であるロイヤル・シェイクスピア・カンパニー（以下RSC）が、英国におけるシェイクスピア教育を批判した。それは調査旅行出発、13日前であった。記事によると、RSCは学校におけるシェイクスピア教育は生徒にとって退屈であるとし、それは教師が演劇的、演技的手法を用いていないためであるとしている。このRSCが指摘した点は、英国のシェイクスピア教育を論ずるには、鍵となる視点である。このRSCの批判はこのシェイクスピア教育における調査目的を明確にしてくれた。さらにRSCのコメントを軸に、調査の中心がしぼられた。まず、政府の教育政策が、いかに中等学校現場の言語教育を一律に統制しているという点を、調査のテーマと考えた。イギリスでは一般中等教育修了資格試験（GCSE）のために学校が国語を含めた、コア科目を強化している。しかしながら、強化することにより、資格試験のための教育となってしまう、言語のための教育、文学作品の本質を読むという教育ではなくなっている。そこで、学校現場を訪問し、実際の授業を見学し、政策と現場のギャップについて調査することを中心に考えた。この現状は例えば日本の場合、高校受験や大学受験を詰め込み教育すること、それによって点数を上げるための教育となっている点から、日本の教育との類似問題として考えられるであろう。比較教育の問題として、この点も興味深いが、将来の研究課題として今回の論点にはしていない。最終的に今回の主たる調査は、演劇、英語教師へのインタビューとシックスズ・フォームの演劇、英語のクラスの見学となった。今後の展開したい議論は、シェイクスピア教育がいかに英国の教育統制、政策から促されているかを、言語力という英国の国力との関わりから、論じたい。

博士論文では、それぞれの章で英国におけるシェイクスピア教育について、特に英国ナショナルカリキュラム制定から、1990年代の見直し、また2000年の再度の見直しといった改革について焦点をあてたい。シェイクスピア作品教育は1988年以来義務化されている。この義務化については、教員、政策論者、演劇集団などの中で様々に論議され、メディアでもたびたび取り上げられている。一方においては、英文学的視点から、シェイクスピアは英国の優れた作家で、義務化されて教えられるべきであるという主張がある。他方、中等教育という視点からは、年齢によっては難解であるとの意見がある。

これまでの自分自身の研究では、英語のカリキュラ内容を中心に論議を追っていた。しかし政策から現場への流れは単純な図式にはならないだろう。政策から教育現場へ、そこで方法論がいくつかに分かれていると考えられるからである。かつて英語は言語と文学と別々な科目であった。しかしナショナルカリキュラム導入以来1つの科目となった。中等教育段階にあたるキーステージ3,4においては最後の段階でナショナルテストが行われ、さらに16歳の段階でGCSEがある。また学校のシラバスが調整され、政府の目標水準を保つために調査もなされている。このような背景により中等教育、とくにシックスズ・フォームにおいて、シェイクスピアを教えることはかなり問題をかかえているといえる。この点については、のちのち議論することにする。

今回の調査、インタビューは次の通りである。授業見学として、ブラントクリフスクールで、パーリー氏が受け持つシックスズ・フォーム2クラス、演劇と英語を見学した。ナショナルカリキュラムとしては、演劇は必修科目ではない。もし演劇を教えるとしても、英語のクラスで演劇のテキストを教えるアプローチとな

る。しかし、シックスズ・フォームでは演劇、パフォーマンスのクラスは選択科目とされている。見学した2クラスの学生はすでにそれまでに、シェイクスピアをナショナルカリキュラムの中で学習してきている。どのような授業内容であったかは、後に述べることにする。

まず演劇クラスは新学期はじめてのクラスであった。英語のクラスは3回目でテキスト本文は2-30ページ進んでいた。学校訪問には、この調査をリーズで実施するにあたり、コーディネートしてくださったリチャード・ウィルコックス氏に同行してもらった。ウィルコックス氏はドラマの授業でシェイクスピア翻訳について、質問の回答をする際、日本人である筆者より詳細に『蜘蛛の巣城』について解説をしてくれた。彼は前のブランドクリフ英語科の主任でかつて、シェイクスピアを含む演劇クラスの指導も様々な方法で実践し、英語、演劇の指導をしていた。現在は編集者として、ブランドクリフを含むいくつかの学校ニュースレターの編集、発行に携わっている。今回の調査による訪問も次回のブランドクリフスクールのニュースレターに掲載される予定である。今後もこの調査は学校、先生方との連絡をとり、対話を継続発展させていきたい。また今回ロンドン大学にて教育学部のディヴィッド・クルック博士にもインタビューし、教育学の分野よりコメントをもらった。下記にそれも合わせて報告する。

2. 演劇クラスと英語クラスのあり方について

① 政策側と、学校現場との差異

2006年9月15日タイムズ教育版に、「ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーのマリア・エヴァンスによると、同カンパニー（RSC）のキャンペーンとして、英国すべての子供へ、学校教育期間に、少なくとも1つのシェイクスピア作品の観劇を必修とさせたい」というコメントを掲載している。

さらに「演ずるという手法を、英語の授業に定着させ、テストにも演劇の実践をいれたい」としている。これまでの授業は確実な意味を理解していないまま記憶重視させているものという批判的なコメントである。まず、この新聞記事に関するウィルコックス氏のコメントである。

シェイクスピアを教えるというのは、いろいろな方法を用いてするのが、質のよい教師と言えると思う。ただ正しさだけを追求するには、シェイクスピアの言語は難しすぎる。理想的なのは、生徒に、映画をみせたり演劇を見せたりすることである。例えば地元の劇場に足を運ぶこともよい。ま

た演劇グループに学校訪問してもらうのもよいと思う。

RSCのコメントについて、非常に賛成である。大衆の意見と考え耳を傾けるべきである。英国の多くの英語教員は、演劇のトレーニングを受けず、演劇を教える経験もないので、このようなコメントはよい方向性があると考えられる。リーズの学校でも十分ではない。RSCの考えは、1970年代に私が目指していたことである。しかし若い世代の教師はやるうとしても、すぐやめてしまい、安易な方向へ陥りがちである。

一方IoEのクルック博士は次のようにコメントしている。

ナショナルカリキュラムでは、演劇は必修ではないから、学校は英語のクラスの中で演劇をおそらく教えている。また演劇と英語の間にあるさまざまなアプローチは多くの学校にあるだろう。だから演劇は英語クラスの中でのみ、注目されるかもしれないが、あくまで必修の科目ではない。シェイクスピアを教えることで問題になるのは、最善と考えられる方法が、演劇を見るか、演ずるかという方法であるからではないだろうか。自分自身の経験からも、1行1行記憶させられ、意味を尋ねられる授業で楽しむこともなかった。その点からは、上演を見ることはシェイクスピアがわかりやすくなる。ステージ上の言葉は実際声に出すので、理解しやすくなる。ただすべての英語の教師が演劇に興味をもつわけではない。彼らはドラマの教師ではなく、英語の教師だからである。

クルック博士が指摘したように、演劇という手法が最善であるにも関わらず、シェイクスピアの言語を国語として教える点は、ナショナルカリキュラムでシェイクスピアを必修化した背景との関わりがあると考えられる。政策側は言語としてシェイクスピア作品を教える、と捉えているのに対して、現場では二つの考えが対立しているのである。すなわち1. 英語として政策側に同意して教える教師。2. 英語といってもシェイクスピアの言語として捉え、さらに演劇作品として捉えその中でシェイクスピア言語を教える、そのためには演劇という手法を用いると考える教師。政策側では言語の試験を実施して、言語を強化することが目的である。そのためには評価が明らかになるので、英語教師も評点がとれるように指導する。ところが演劇と

して捉える側は、テストの詰め込み教育をすると、演劇を使って内容を十分指導できないと考えるが、テストの評点のために矛盾をかかえたまま指導にあたる。では実際そのテストを終えて、シックスズ・フォームに進級した生徒の授業内容について、次に報告する。

② 授業例（ドラマクラス）

ブラントクリフスクールのパンフレットに謳われている、シックスズ・フォームの演劇クラス内容によると、「AS レベル1年、次に13年生のA2へと進む。この科目でAをとると、様々な大学進学への道が拓ける」としている。14歳から19歳までの演劇クラス用評定目標の中に、テキストと、演技についての関係を、演出的視点と、批評的視点により認識するとある。演劇が中等教育では必修でないので、演劇クラスを初めて受講する生徒には、演劇の可能性というものが、テキストと異なるところにあるという認識が重要である（註1）。特にナショナルカリキュラムでは、断片的に作品を（2、3シーン）学ぶので、作品全体をテキストで読むわけではない。ペリー氏の演劇クラスでも、最初にまず生徒が演劇の持つ可能性について考えるように、シェイクスピア作品の特徴や、その場面について生徒に質問している。これについて受講している6名が発表した。彼らがキーステージ3、4において、習った作品は、『マクベス』、『ロミオとジュリエット』、『夏の夜の夢』であった。生徒の発表内容は、例えばバルコニーシーン（『ロミオとジュリエット』）や、3人の魔女（『マクベス』）などであった。シックスズ・フォームの生徒は、キーステージ4までに、作品を劇場ではみていないが、授業の中で映画を見ている。生徒は作品の内容や場面は想像できていたが、演出指示があるのか、またはかつてあったのかなどと質問を先生にした。実際のステージでどのように表現されるのかを教えるのには、ペリー氏やウィルコックス氏が、今まで印象に残ったステージ演出例などを説明していた。興味深い質問として、エリザベス朝の言語を日本語にどのように翻訳することが可能かと訊かれたことである。ウィルコックス氏が映画の例をあげ、説明した。それが、黒澤明監督の*Throne of the Blood*（邦題「蜘蛛の巣城」）であった。侍の時代設定で翻訳（註2）しているという説明を加えたところ、彼らは侍についての知識があったので、みな理解していた。演劇を見ること、特にロンドンで観劇するなどは、シックスズ・フォームに進学した学生にもこれまではなかったようである。RSCが薦めている、観劇の経験は確かに必要であるが、実際リーズから学生を連れてロンドンに行くのも、観劇ツアーとして計画を立てなければならな

い。ウィルコックス氏はかつてブラントクリフの生徒を連れて、観劇ツアーをしていたが、日常の業務の合間にするのは本当に大変だったという。ウィルコックス氏は恐らくペリー氏も同様の計画を立てるであろうと、筆者に話した。

③ 授業例（英語クラス）

授業テキストはアーデン版『尺には尺を』であった。クラスは全員で6名であったが、そのうち3名は大学の見学や、欠席などで、実際に授業に出ていたのは3名であった。講義形式に座り、全員でテキストの意味を考え、場面を分析しながら、セリフを音読していく。3名であっても、質問に全員が答える。英語クラスでもドラマクラス同様に、ペリー氏は進んで、シェイクスピアらしさのアイロニー、隠喩、テキスト上では見えない意味を質問した。ただ、スタジオでのドラマクラスに対し、座ったままでテキストを読む授業をみると、シェイクスピアを理解するクラスというよりも、テキストを読む日本の国語のクラスと違いがない。ペリー氏の1週間のクラスは28コマあり、ほとんど休みがなく次の授業準備をする。日常の業務が忙しい中、教師はテストの評点を上げなくてはならない。カリキュラムだけを日本で分析するだけでは、見えてこない現場の様子が印象に残った。

3. 英語カリキュラム内容とその評価テスト

実際の現場で起こっていることを、ウィルコックス氏が以下のようにコメントしている。

実際、現場では日常的にシェイクスピア教育が非常に困難であることも否めない。つまりそれほど簡単に生徒はシェイクスピアを嫌いになるからである。非常に残念である。キーステージのテストは90年代から施行された。政策としての全国識字戦略（NLS）（註3）には非常に理解できない点がある。つまりキーステージのテストはよくシステム化されていて、受験者はみな結果を書面でもらう。その試験はマークシート式なので、スコアを上げるのもそんなに難しくはない。それをNLSはただ慣習的にしているのである。だから、どんなクラスを受けても生徒には、その試験でマークすることがすべてとなる。日本でも同様なことがあると思う。だから一度教えて、次に教えることは新しいことである。前に戻って、復習するのではない。本当に教えたことをスパイラルに教えるのではなく、断片的なのである。英語のカリキュラムも、次々教えるだけなので時間の余裕がな

く、より広く、深く精読することはできない。しかし文学や演劇で大事なことは、育てることである。植物を育てるように、有機的に育てることが大切である。化学肥料を使って簡単に育てるのではなく、1つの理論に全員を当てはめるのではなく、有機的に栽培するように、生徒を一人一人、みていくべきである。

現場では授業内容がナショナルカリキュラムによって統制されている。カリキュラムという視点から、クルック博士が以下のようにコメントをしている。

シェイクスピアについて、上層階級や年輩者の興味にくらべ、教師、生徒、中産階級など、興味がそれほどないように思う。実際（シェイクスピアを含め）英語のカリキュラムについて考えると、それはむしろ論争になりがちである。主要な論点はカリキュラムにある作品のリストであった。人々はAが含まれているのに、なぜB作品がはいっていないのかという不満をもちます。シェイクスピア作品に対しても論争になりがちである。というのもシェイクスピアが歴史の中で重要とはわかっていても、シェイクスピアの言語を現在は使わないし、その筋、せりふは必ずしも子供たちに適したものではないからである。なぜシェイクスピアを教えるべきかについては、なぜ、他の作家を教える必要がないのかということと、重なる。それは歴史のカリキュラムにおいても同様で、何の歴史、どの出来事をカリキュラムにいれるのかということで論争になる。ところが数学ではどうだろう。計算は実生活に必要である、などという明確な理由で内容を決める。文学ではそうはいかない。ましてシェイクスピアの場合、ほとんどの人が劇場に行かないのである。

シェイクスピアについても、英語カリキュラムそのものについてもかなり議論、記事がある。ナショナルカリキュラムのために組織されたワーキンググループの内容については、調査に行く前に第15回日英教育学会で口頭発表した。その時点では英語教育とシェイクスピアという内容で、議論を追っていたが、実際は演劇と英語とシェイクスピアについて、カリキュラム、現場、政策を見直し、さらに作品の選択や作品の授業例を分析し、問題点を分類する必要があると考える。

4. 結び

クルック博士は「なぜシェイクスピアを教えるべきなのか」について、筆者に研究を続けることを薦めたが、イギリスにおけるシェイクスピアの重要性や価値というものは、実際日本の英文学で考えられているものと相当ずれがあるように思う。必修となっているシェイクスピアの教育における必要性が問われ、言語としての日常性を問われ、さらに観劇の経験を義務化することまで議論されている。そのようにしてまで教え続けられているシェイクスピア作品を、文学、社会、教育という異なる視点から捉えるのは非常に興味深いと考える。ナショナルカリキュラムが制定された1988年以前の社会状況を考えると、たとえば1985年のスワン報告書では多元化社会における教育の役割について政府見解がだされている。しかしながら1988年にナショナルカリキュラム制定時、多元的な状況より、英国らしさを強化した。その1つがシェイクスピアの必修化である。つまりサッチャー政権の教育制度改革である、ナショナルカリキュラムは、英国としての社会統合政策であり、それがシェイクスピアを必修教育するという言語教育にまで影響したと考えられる。国の教育政策がいかに関与したのかということも、社会的背景や文化的背景を視野にいれ、「なぜシェイクスピアを教えるのか」と今後も問いかけていきたい。

今後の発表予定としてはこの内容をカリキュラム研究の素材とし、日英教育学会（代表 上田学氏 京都女子大学）で再度発表および、投稿したいと考える。さらに、現代イギリス教育研究会（代表 佐々木 毅氏 国立教育政策研究所）、サテライト研究会においても、口頭発表を計画している。

註1: QCA, *GCE A level performance descriptions Drama and Theatre Studies 2003*

註2: 実際は翻案である。

註3: 現在の *The Secondary National Strategy* である。

参考文献

- Dean, Geoff., *Teaching Reading in Secondary Schools.*, David Fulton, London, 2003.
- Hornbrook, David. 'Drama and Education', *On the Subject of Drama*, ed, David Hornbrook. Routledge, London, 1998.
- Times Educational Supplement* 2006.9.15.
- <http://www.literacytrust.org.uk/update/strat.html>
- <http://www.dfes.gov.uk/>

【指導教員のコメント】

英国の中等教育におけるシェイクスピア教育は、サッチャー政権の頃より政治に左右されてきたが、自国語教育・文学教育・演劇教育という3つの局面に対して、どのように政治が関与し（関与せず）、それに対して教育現場がどのように対応してきたかは、文学テキストの受容・流通、またそれらによる国民形成という点で、重要な研究題材である。本調査研究は、政府指針を踏まえた上で、実際の英国の学校における授業運営を観察・調査し、英国における文学と教育の関係を分析する研究の端緒をなすものである。この研究は、英国やシェイクスピアといった特殊性に限定されるものではなく、グローバル化する現代において、どのように自国の言語を文学テキストの位置づけをめぐって教えていくかという点で、日本の状況にも示唆に富むものとなると思われる。本調査研究は、学会発表・投稿論文として公表するとともに、シェイクスピア教育と政治の動向をテーマにした博士論文の貴重な分析資料となり、執筆者の視点を明確にするうえでも有意義なものである。

（文教育学部 教授 竹村 和子）